

しかし、飢肥を中心とする日南市も、昭和三十年時代からの高度経済成長期以降は地方市の御多分に漏れず、昭和三十一年の六万三千人をピークに人口流出による過疎化が進んだ。そうしたなかで、飢肥城を中心に飢肥石の石垣と門、伝統的な住宅からなる武家屋敷群飢肥の町並みは住時の姿を留めていた。

そのような流れの昭和四十九年に、当選したばかりの河野礼三郎市長が市をあげての町おこしとして、飢肥城の復元事業を打ち上げた。しかし、自主財源がないために「飢肥城復元協働会」を発足させて全市をあげての募金活動を推進していった。同時に市議会において「文化財保存都市宣言」を行い、一方で、高山市、倉敷市、南木曾町などの町並み保存の先進自治体とともに「町並み保存に関する要望書」を国に提出するなど、古い町並みを生かした町おこし戦略を明確に打ち出した。国では、翌年の昭和五十年に文化財保護法改正を行い、伝統的な町並みに対して重要伝統的建造物群保存地区の選定ができるとした。つまり、町並みの重要文化財である。

日南市では、早速に飢肥城下町の伝統的建造物群保存対策調査を実施して、昭和五十一年伝統的建造物群保存地区の決定と、「日南市伝統的建造物群保存地区保存条例」を制定し、昭和五十二年に九州では最初の国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。選定の理由「地方における小規模な城下町の典型的なものとして侍屋敷の歴史的風致をよくあらわし我が国にとってもその価値は高い。」である。市の条例では、保存地区内の景観に関わるすべての工事について許可制として、必要なものには補助金を交付するとした。

この間にも飢肥城復元事業が進められ、昭和五十一年に飢肥藩の藩校であった振徳堂を改修し、昭和五十三年に大手門の復元と歴史資料館の建設、昭和五十四年に書院造り御殿としての松尾ノ丸を建設した。総事業費五億千八百万円のうち、二億二千万円を市民や市出身者、有志業からの募金で賄った。これらの施設のうち、とりわけ歴史資料館には、城下町の武家屋敷に大切に保管されていた刀剣

や甲冑、調度品、掛け軸などが寄託資料として寄せられ募金とともに市民総参加でつくりあげた施設として、市民の誇りとなった。そのことは歴史資料館の完成した昭和五十三年に飢肥城下町の一大イベントとして「飢肥城下まつり」が華々しく始まったことから伺える。今では市民の二倍以上を集める大きな祭りとなった。

#### 「本町通り拡幅事業」

このように、飢肥城下町の町並み保存のきっかけとなったのは飢肥城復元事業と伝統建造物群保存地区の決定という行政主導の事業であった。しかしそれに先だつて、飢肥の町並みにとって重大な選択を迫られた道路計画があった。本町通商店街を貫く国道二二二号のバイパス計画である。飢肥城下町で、四百年以上の歴史がある本町通商店街は、日南市の過疎化のなかでかつての賑わいを失いつつあった。そこへ、追い討ちをかけるようなバイパス計画であったため、本町通商店会では危機感を強めた。計画が発表されてまもなくの昭和四十五年には早速「本町通り拡幅期成会」を結成し、県や国に激しい陳情合戦を繰りひろげた。その結果、昭和四十八年に現道を拡幅することに内定して、翌年から調査に取りかかっている。折しも、飢肥城復元事業と町並み保存の計画が打ち出された時期であった。

本町通りの拡幅工事が本格化した昭和五十二年は、飢肥城下町が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された年でもあった。それまでの白壁造りの商家を取り壊して道路を拡幅していく工事が始まってまもなく、失われるものの価値に気付いた本町通り商店街の人たちは、道路拡幅後に新築する商店街を飢肥城下町にふさわしいものに作り上げようと模索はじめた。昭和五十三年に「本町通り町並み研究会」を結成し、全国の先進地視察や資料収集の結果、まったく行政の手を借りずに自主的に次のような申し合わせを決めた。

1 家は日本風に統一しましょう。

2 家は溝から一mさげましょう。

3 軒は溝までだしまししょう。  
4 軒の高さをきめましよう。

5 ケバケバしい色はさけましよう。

この結果、城下町にふさわしい和風の商店街が住民の力でできあがった。国道のバイパス計画を拡幅に変更させたこと、全く新しい商店街を自分たちの調査研究と自主的な申合わせで作らあげたことは、本町通りの人たちの大きな自信となった。行政でも、この動きに呼応して、寄贈をうけた旧家を移転復元した商家資料館を建設して、本町通りの歴史を顕彰している。

#### 「その後の事業」

このように、飢肥城復元事業と伝統的建造物群保存地区保存事業、そして本町通り拡幅事業の三つの大きな事業を行政と議会、住民が一体となって、時期を同じくして推進したことに飢肥城下町のまちづくりの特色がある。

その後、飢肥城下町のまちづくりには歴史的な景観を生かす方向が確定した。昭和五十七年にはかつての水郷飢肥を復活させるために、道路側水路にコイを放流したり、大手・横通りの電柱移転と街灯を設置した。それにあわせて、平成元年には宮崎県日南警察署が同区の道路標識を大幅に減少させるとともに、大きさを小さくする事業を行っている。また、周辺の酒谷川の災害復旧工事においても、宮崎県日南土木事務所は城下町のイメージを意識した修景を行っている。さらに、城下町の南を通過する市道についても、本来ならオーブンカットすべきところを城下町の自然景観を維持するためにトンネル工法を採用している。平成五年には、再び市民の募金によって、飢肥出身の偉人小村寿太郎を記念した「国際交流センター小村記念館」を建設、本町通りにも県の無形民俗文化財である「泰平踊りの保存のため「飢肥郷土芸能館」を建設している。

以上のように、行政と住民が一体になって生み出した歴史的景観と文化財を生かしたまちづくりは、日南市のシンボルテーマ「歴史

と文化の香る都市」となって、日南市行政の中心課題となって現在に至っている。

飢肥城復元事業に始まる飢肥のまちづくりも二十年を経過したが、残された課題も多い。とりわけ、住民の高齢化や世代交替に伴う屋敷地の細分化と空家の増加、それに伴う商店街の沈滞化は飢肥のまちづくりを基礎から揺り動かす問題である。これらの問題を考えるため、平成六年度より、市行政と住民、議会、学識経験者、建築士からなる飢肥まちなみ研究会が発足した。平成七年度には、その活動成果として「飢肥のまちなみ歴史的景観を生かしたまちづくり」を刊行した。

平成十九年、飢肥城下町は、重要伝統的建造物群保存地区選定三十年を迎えることとなった。この間、旧伊東伝左衛門家、旧山本猪平家、小村寿太郎生家等の改修整備を含む一四〇件の修理・修景の補助事業を実施してきた。

一方、市民による飢肥城下町を舞台としたまちづくり活動も活発になってきた。飢肥城下の商人町である本町通りの拡幅事業では、国道のバイパス計画を拡幅に変更させるとともに、全く新しい商店街を自分たちの調査研究と自主的な申し合わせで造り上げたことは、本町通りの人たちの大きな自信となった。行政でも、この動きに呼応して、寄贈をうけた旧家を移転し商家資料館を建設して、本町通りの歴史を顕彰している。

さらに、近年では、飢肥楽市楽座の城内コンサートや、飢肥にあかりを灯す会のキャンドルナイト、祐兵クラブの人力車、おびまゆの会のひな祭り、小京都の会の花飾りなど各団体がさまざまな活動を行っている。とりわけ、日南市観光ガイドボランティアの会は、年間一万人の無料ガイドを行っており、飢肥観光の大きな柱となっている。

こうした行政・民間の取り組みは、第十三回優秀観光地づくり賞金賞や岩切章太郎賞の受賞や、美しい日本の歴史的風土百選に選定

されるなど、近年になって高い評価をうけるようになってきた。

## ② 油津の町並みと堀川運河の保存・活用 「油津の歴史」

日南市油津は、宮崎県南部の日向灘に面した港町である。貞享三年（一六八六）、飢肥藩伊東家五代藩主祐実によって、広渡川と油津港の間に堀川運河が開削された。大正六年（一九一七）には全国七カ所のうち、九州で唯一の漁港指定を受けて港湾整備が進み、昭和四年（一九二九）からマグロの水揚げが急激に増加して、戦前は東洋一のマグロ水揚げを誇った。

さらに、江戸時代後期から領内において大規模に植林された飢肥杉が、明治時代後期から昭和初期にかけて伐採されたため、堀川運河の兩岸は弁甲材（飢肥杉の両面を面取りしたもの）の集積加工場となり、国内はもとより、台湾や朝鮮半島、中国大陸まで輸出されていた。飢肥杉は、浮力があって曲げに強く、油分も多いために造船材として最適であることから高値で取引され、これ以後、油津や飢肥の山林関係者を大いに潤すことになる。

このように、マグロと飢肥杉の取引で栄えた油津には、仕事を求めて多くの人が集まり、大正九年（一九二〇）から昭和十五年（一九四〇）にかけて人口が二倍に膨れあがるとともに、都市基盤の整備が進み、大正二年（一九一三）には飢肥、油津間に県内最初の軽便鉄道が敷設され、大正十年（一九二一）には県内最初の上水道も完成することになる。

油津の町は第二次世界大戦による米軍空襲で一部を焼失するが、幸いなことに堀川運河周辺部を中心に、当時の建造物が約二一〇棟も残されていた。

戦後、すぐに飢肥杉とマグロで栄えた油津の復興が計画され、国鉄油津駅から広渡川までの堀川運河北部区域が区画整理されて、市街地化されることとなった。高度経済成長期には、宮崎県南部の中

心商業地として油津は活気あふれる都市となる。一方で、かつては、油津の子どもたちの水泳場所でもあったぐらいいきれいな堀川運河の水は、全国の河川と同じように家庭排水や飢肥杉土場からのおが屑などによるヘドロで汚れて、悪臭が漂うようになっていた。

折しも、飢肥杉の需要が減少して、堀川運河周辺の土場が空き地化して、新たな土地活用が検討されてきた。昭和五十一年（一九七六）には、大油津港建設が中央港湾審議会で審議され、油津港整備の一環として、宮崎県が管理する港湾施設の一部であった堀川運河も埋め立てられることが決定してしまう。

### 「運河再生にむけて」

埋立計画は実施されて、堀川運河支線の第一運河、第二運河が埋め立てられ、いよいよ堀川運河本体が埋められようとする直前の昭和六十三年（一九八八）に、地元住民を中心として「堀川運河を考える会」が結成された。同会は、地元住民にアンケートを実施するとともに、堀川運河まつりを開始して、堀川運河の価値を見直す運動を展開していった。

平成三年（一九九一）には、日南市観光協会主催の「日南市堀川運河シンポジウム」が開催され、宮崎日日新聞でも「日南堀川運河物語」が連載された。平成四年（一九九二）には、「男はつらいよ 寅次郎の青春」ロケが堀川運河周辺で行われるとともに、NIC 21（日南市内の異業種交流グループ）による油津の歴史と文化、そして今後のまちづくりを展望した『油津―海と光と風と―』の執筆、編集が開始された。油津を愛する市民によるこの作業は、油津のすばらしさを再認識するとともに、その価値を共有するためのかけがえのない仕事となるとともに、油津のまちづくりの原点になったように思う。

平成五年（一九九三）には、このような市民活動の盛り上がりを受けて、宮崎県は、運輸省の「歴史的港湾環境創造事業」の指定を受けて、堀川運河整備を決定する。さらに、同年正月には「男はつ